

『死神少女は最後に天国に行く』七種夏生

少女
(15)

男
(36)

登場
人物

幽
霊

ホ
ー
ム
レ
ス

あらすじ

ホームレスとして公園で暮らしている主人の男は過去に付き合っていた女性の妊娠報告に気が動転し、彼女を傷つけ別れを告げたことを後悔していた。

そんな男の元へある夜、一人の少女が現れる。男の過去を知っている少女の正体は幽霊、学生時代に別れた彼女との間にできた、男の娘だった。少女の話によると彼女の母親、つまり男の元恋人は今病院にいるという。

「今晚天国に行くから会いに行け」という少女の言葉に従い、病院へと足を運ぶ男だが途中で事故に遭い、元恋人が看護師として働く病院へ搬送される。天国へ行くのは元恋人ではなく、男の方だったのだ。

少女の想いや元恋人の変わらない愛に胸を打たれ、心を入れ替えた男。来世では絶対に少女と元恋人を幸せにすると誓い、天国へ向かうのだった。

男が公園を徘徊している（ゴミ箱あさるなど、公園暮らしの様子）

少女登場、男に声をかける。

少女「ねえ、なにしてるの？」

男「えっ？ あ、俺……いや、えっと……君こそ時間わかってる？ こんな夜中に」

少女「質問してるのはこっち。何してんの？」

男「俺は……」

少女「ご飯探してゴミ箱あさってたの？ 公園暮らしたのは大変ね、帰る家もなければご飯もない。ホームレスって言うんだっけ、そういうの」

男「……家どころか何も持ってないよ、俺は。それより君だ、夜中の二時に女の子が出歩くもんじゃない」

少女「余計なお世話だし、その心配もない」

男 「えつとな……あ、じゃあお化けが出るぞ？ 今は丑三つ時って言ってな、お化けが出る時間なんだ」

少女 「馬鹿にしてんの？ お化け怖がるような年じゃないし」

男 「君、何歳？」

少女 「……十五」

男 「まだ子供じゃないか。早く帰りなさい、親が心配する」

少女 「心配しないし、捨てられたから、私」

男 「捨てられた？」

少女 「あ、違う。お母さんはすごくいい人よ。今は家にいない、病院にいるけど」

男 「病気なのか……」

少女「私を捨てたのは父親のほう。最悪な男
でさあ、私を身ごもったお母さんを突き
飛ばして逃げたの、子どもなんておろせ
俺には関係ないって怒鳴って。お母さん
とはそのまま別れたから父親、私の顔す
らわかってない」

男「……そうか」

少女「でもそのあとの人生が面白くてさあ。
あ、学生だったんだけどね、お互いに。
学校行きづらくなって就職もできなくて
親とも縁切って、思い切って公園暮らし
始めたらそのまま抜け出せなくなって。
今の今になって後悔してるの、家どころ
か何も持ってないって」

男「……それって」

少女「まるで俺じゃないか、って思った？」

男「なんでそんなこと……」

少女 「お母さんが私を身ごもったの、十五年
前なの。あれー？ 私さつき、何歳って
言ったかな？」

男 「十五、って、まさかお前、あの時の俺
とあいつの……」

少女 「お母さんには似てると思うんだけどな
あ」

男 「いや、俺だろ……俺の若い頃と、同じ
顔してる」

少女 「男顔ってこと？ 嫌なんだけど、それ」

男 「どうして俺が父親だってわかった？」

少女 「聞いたから。見てたしね、ずっと」

男 「見てた？ あいつ、俺のこと見てたの
か？」

少女 「お母さんじゃないよ。お母さんは何も
知らない、別の人……人？ から聞いた」

男 「ああ、そんな仕事があるもんな、世の

中には。で、そいつから聞いたのか、こ

この公園で暮らしてるクズがお前のオヤ

ジだよって？」

少女 「……お母さん、市立病院にいるの」

男 「は？市立病院？」

少女 「今日、あの世へ行くことになってる」

男 「あの世って、死ぬのか？ あいつが？」

少女 「お母さん、あなたに会いたがってる。

今日を逃すともう機会なんてない、だか

ら私、あなたのところ来たの」

男 「あいつが俺に……嘘だろ？ 俺、あい

つに酷いことして……」

少女 「好きになっただけは仕方ないでしょ？
ずっとあんたが好きで、恋愛だってま

もに出来なくて、お母さん苦しんでた。
だから行きなさいよ、最期なんだから」

男 「最期……会ってくれるかな、俺に」

少女 「だから、ずっと会いたがってたんだっ
てば！」

男 「……行く。会いに行く、市立病院だっ
たな。そうだ、病院に入るなら服装……」

少女 「服は気にしないでいいから、それより
髪と髭。ばっさり切って髭も剃って、昔
の面影がでるようにしといて」

男 「髭かあ、確かにな。あいつ、俺のこと
わかるかな？」

少女 「顔さえ見えればいいから。あ、顔は綺
麗なままでいてよ？ 顔だけは怪我しな
いように」

男 「顔に怪我って、大怪我だろそんなの」

少女「あとはお風呂：：はないんだっけ？と
にかく体洗つといて。臭いとみんなイヤ
だろうから」

男「わかった。頑張ろう、生まれ変わるん
だ俺は、今日生まれ変わる」

少女「：：わかってんじゃん、がんばって」

男「何時に行けばいい？ 面会時間てのが
あるんだろ、たしか」

少女「昼過ぎ：：二時くらい、たぶん」

男「わかった、この公園集合でいいか？」

少女「集合？ もしかして私についてきても
らおうとか思ってる？ 冗談じゃない、
一人で行きなさいよ」

男「え？ でも俺一人：：」

少女「生まれ変わるんでしょ、あんた」

男 「そ、そうだな、がんばるよ一人で！」

明日の二時か」

少女 「明日じゃなくて今日、今日のお昼二時！」

男 「ああ、そうか。こんな生活してるから、時間間隔がくるってさ」

少女 「情けないね、本当」

男 「そうだな、情けない……」

少女 「間に合うよ、今からでも」

男 「え？」

少女 「変わりたいと思った瞬間に心の持ちようが変わる、決意して動き出したその日から人生が変わる。大丈夫よ、あと一日しかないけどまだ間に合う、あんたは生まれ変わることが出来る」

男 「……偉いな、お前は」

少女 「なに褒めてんの？」

男 「俺の娘とは思えないほどしっかりしてて、ちゃんとしてる」

少女 「お母さんの血が濃いからね」

男 「頑張るよ、俺……がんばるから」

少女 「いうだけなら簡単だけどね。本気で変

わりたいならちゃんと、動きなさいよ。

（時計を一瞥して）あっ、二時半になる。
帰らなきゃ」

男 「帰るのか？ 家まで送るよ」

少女 「はあ？ いらないし迷惑だし」

男 「でも夜道危ない……」

少女 「うるっさいなあ！ 大丈夫だから」

男 「……わかった、気を付けろよ」

少女 「はいはい、じゃああね」

少女、去ろうとするが途中で振り返る。

後をつけようとしていた男、びくっと

して動きを止める。

少女「後つけようとか思っていないよね？」

男「いや……」

少女「ついてきたら今殺す」

少女、足早に去る。

男「殺すって……」

男、ため息をついて空を見上げる。

男「変わりたいと思った瞬間に心の持ちよ

うが変わる、か……変えよう、自分を。

そんでちゃんと動いて、人生を変えよう」

男、天に手を伸ばす。

男「俺は今日、生まれ変わるんだ」

暗
転

男、物陰に隠れてかつらと髭を取る。
短髪と髭なし、服装は変わらず舞台中
央へ。

以下、台詞と同時にその動作。

男 「拾ったカミソリで髭を剃った、髪も切
った、残飯を探して十分な栄養を取ると
顔色が良くなった。服は気にしなくてい
いと言われた。十二時間前の自分よりも
随分マシになった。どうして逃げていた
んだろう、形を変えるのは、生まれ変わ
るのはこんなに簡単なのに」

舞台明るく、日が昇り始める。

男 「太陽が傾き始めた……そろそろ二時だ
な。行かなきゃ……行こう」

男、歩きながら話をする。

男

「くだらない毎日が姿を変えた。花見客の残飯で潤う春、茹だるような夏、獣のように果実を求める秋、耐え忍ぶ冬。野犬はもちろん、頭のおかしな連中に狩られる恐怖から逃げる日々、公園の隅っこに隠れてうずくまって。来年には生きていないかも、いつ死ねるんだらうって。考えない日はなかった」

男、立ち止まる

背景に「市立病院」の看板、それを見つめる男。

男

「そういえばあいつ、名前なんだろう。今度会ったときに聞こう、まずは病院に行って謝って……忘れたことなんてない、ずっと好きだったって言おうかな。無理だな、恥ずかしい……いや、頑張ろう。」

俺は今日生まれ変わる、聞いて欲しい話があるんだ」

スキップのように駆け出す男。

鈍い衝突音とともに舞台真っ暗に。

救急車のサイレンの音、赤い光。

声 「市立病院前、自動車と衝突した男性を搬送します」

男の声 「もし、生まれ変わったらさあ、今度は……」

暗転

少女が座っているベンチの端に、男が腰掛ける。

少女 「おつかれー、どうだった？」

男 「すげー痛かった。なんかこう、ドンつて目の前が真っ暗になって、目玉飛び出た」

少女 「飛び出てないから。顔崩れてたらぶっ殺してた。あ、もともと崩れてるか、あんな顔」

男 「おまえ、どっちかってーと俺似だからな？」

少女 「似てませんー、お母さん似の美少女です」

男 「美少女ってのは認める」

少女 「……まあ、もうぶっ殺せないしね、あんな死んだから」

男 「さっき体が死んで魂が抜けた。幽霊なんだな、今の俺。猫にまで威嚇されるし」

少女 「臭かったんじゃない？」

男 「うるっせーな、これでも必死に体洗ったんだよ！それでも、救急車の中では臭かっただろうな」

少女 「交通事故だったんだねー。あんたを轢いた車、居眠り運転だったらしいよ」

男 「そんな状態で運転すんなよ：：死ぬのはあいつじゃなくて、俺だったんだな」

少女 「ヒントはあげてたでしょ？服は気にしなくていいから顔だけは綺麗にとか、臭いとみんなイヤだろうから体洗えとか」

男 「血だらけの服なんかすぐに剥ぎ取られるしな。ああ、そうか、顔だけは綺麗にって、おまえの母さんが俺に気づくように」

少女 「昔の面影がでるように。お母さんに会えたでしょ？ どうだった？」

男 「元気に看護師やってたよ。そこも騙してたんだな、病気じゃなくて看護師として病院にいるってことだったのか」

少女 「騙したわけじゃないって。あんたが勘違いしてただけ」

男 「勘違いもするだろ、あの言い方だと：あいつさ、泣いたんだ。俺の顔見て、俺の名前を呼んで：あいつ、俺に気づいてた。こんなに年とったのに、俺だっ

てすぐに、わかってくれた」

少女 「お互いさまでしょ、あんただってお母さんのことわかった。ごめんな、ごめんってずっと、心の中で謝ってたじゃん」

男 「今だから言えるけど、ずっと心残りだったんだ。喧嘩したあとあいつ学校辞めて引越して。俺はこんなだから探すこともできないし。ずっと後悔してた」

少女 「綺麗だなあ、こんなに綺麗になったのか。好きだ、ずっと好きだった、って言ったもんね、心の中で」

男 「……え？　なんで知ってんの？」

少女 「心の声を聴けるのは幽霊の特権ですか
ら」

男 「なんだよ、その特権。やめてくれよ……
： そうだよな、幽霊の俺と話せてるって
ことはお前も、幽霊ってことだよな……
あれ？　でも俺、昨日おまえと喋ったけど」

少女 「死期が近づくとも自分に近い人の霊と
話できるようになるらしいよ。深夜二時、
丑三つ時の時間限定らしいけど」

男 「なるほどな、幽霊が出る時間……不思議
だな、昨日は何とも思わなかったのに、

自分が幽霊になった途端、お前も幽霊だ
ってわかった」

少女 「鈍いねー、靈感ある人はすぐ気づくよ」

男 「靈感あるやつと話したことあるのか？」

男か？ どんな男だ？」

少女 「なに急に。話したことはない、みんな
気味悪がってすぐ逃げるから」

男 「俺がはじめての男かあ」

少女 「え、言い方……きもいんだけど」

男 「お前、いつ死んだ？」

少女 「私？ あー……マイナスゼロ歳？」

男 「マイナスゼロ歳？」

少女 「人間になれなかった、生まれることす
らできなかつたの」

男 「それって、まさか腹の中で……」

少女「あ、勘違いしないで。お母さんは私を産もうとしてくれたよ。貧乏だし学生なのに、頑張って産もうとしてくれた。馬鹿だよ、両親、私の祖父母にあたる人ね、あの人達にも説教されてた。父親は誰だ、わからないってどういうことだ、って」

男「わからない？」

少女「おろせ俺には関係ない、迷惑かけるなって、怒鳴って突き飛ばした。お母さんからの連絡も全部無視して、学校にもしばらく行かなかったでしょ、あんた」

男「そのせいで、一人で……」

少女「でも無理だよ。貧乏だもん、お母さんの実家。奨学金だっけ？ 借金もあるのに、私を育てるなんて……だから私は自分で自分を殺した。おなかの中で、生まれる前に自分を殺したの」

男 「……痛かったよな。死ぬって本当に、痛いことだよな」

少女 「痛いよ、死ぬ本人も残された人もみんな、どこかが痛くなる」

男 「それですつと、俺たちの周りをさまよってたのか？」

少女 「自殺はダメなんだって。両親の死を見届けなさい、それまでは生まれ変われないって、あの世の案内人？　みたいな人に言われた」

男 「じゃあ、おまえは俺達より後に生まれ変わるんだな」

少女 「そうなるね」

男 「じゃあまた、俺のところ来い」

少女 「は？」

男 「次の人生は絶対におまえの母さんを幸せにする。子供を産んでも問題ない家庭にしとくから。だからまた、俺たちのところへ来い」

少女 「……なに言ってるの」

男 「公園で遊ぼう！ あ、ほら、そこにジヤングルジムあるだろ？ あれに登って競争して」

少女 「いやよ、あんたすぐ怪我するんですよ？」

男 「怪我？」

少女 「お父さんやんちゃだからお母さんいつも絆創膏持ち歩いてて、だから看護学部でよかったって思ってたって。私に話してくれ」

男 「そ、そんなことないぞ？ スポーツ万

能でいろんなサークルから引っ張りだこ
で、怪我なんてしたこと……」

少女 「なに？ お母さんの話が嘘だったって
言いたいの？」

男 「……すみません、俺は運動音痴で生傷
の絶えないやんちゃ坊主でした」

少女 「はあー、生まれ変わってもお母さんは
看護師かなあ」

男 「お、俺もがんばるぞ！ そうだ、弁当
は俺に任せろ！」

少女 「おにぎりの具にカレーはやめてね？」

男 「あいつ、そんなことまで喋ってたの
か！」

少女 「ありえないでしょ、ラップからカレー
がはみ出してどろどろになるとか。……」

喜んでたけどね、お母さん。あなたのお父さんは変わったおにぎりを作るのよって、笑って言ってた」

男 「今度はちゃんとする、ラップからはみださないように作るから」

少女 「え、いや。そもそもおにぎりにカレーってのが無理」

男 「じゃあ、次はシチューに」

少女 「馬鹿なの？ おにぎりの具といえばツナとかまぐるとかキュウリでしょ？」

男 「……巻きずしの具が混じってないか？」

少女 「巻きずし？ ……お寿司屋さんにも行きたい。新幹線が運んできてくれるの、ひゅーんって」

男 「おお、そうだな、いこう！新幹線にも

乗ろう！ 稼がないとなあ、来世は。そ
ういえばおまえ、名前は？」

少女 「なに急に。あるわけないでしょ、生ま
れてもないんだから」

男 「そうか、じゃあ考えといてくれ」

少女 「考える？」

男 「母さんの死を見届けないといけないん
だろ？ しばらく暇だろうから。考えと
けよ、次生まれる時、どんな名前がいい
か」

少女 「どんな名前って……」

男、ベンチから立ち上がって歩き出す。

男 「じゃあな、娘よ！ 息子になってたら
公園でキャッチボール……してもらえ、

母さんに。弁当は俺が作って、そしたら俺、専業主夫になろうかな。がははははは

少女「ちよ……あんた料理下手だから！ それにさつき稼ぐって……何なの、もう。名前だって、私が考えてどうするのよ」

勢いで立ち上がった少女だが、再びベ
ンチに腰掛ける。

少女「生まれ変わったら、また……今度は本当の、家族になれるかな。名前、どうしよう。お母さんが死ぬまで時間あるし、ちよつと、考えてみようかな」

暗転

照明、中央だけ明るく。

ちゃぶ台の前に男。

少女、光の中に入る。

男 「おお、久しぶりだな。母さんは？」

少女 「さっき息を引き取った。もうすぐここに来る」

男 「じゃあ、俺もそろそろいかないとな」

少女 「お母さん、誰とも結婚しなかったよ。好きな人もできなかった」

男 「そうか。俺がいい男過ぎて……」

少女 「自分で言うな！ あんた、天国に居つきすぎて性格おかしくなっていない？ 早く生まれ変われば？」

男 「あいつを待ってたんだよ、おまえの母さんをな。歳が近い方が出会える確率が高くなるだろ？」

少女 「それは建前で？」

男 「本音は天国が居心地いいから……って、そんなわけないだろ！ 見損なうな！」

少女 「どーだかね。どうしてお母さん、こんな男に惚れたんだろ」

男 「そんなこと言ってるけどな、女の子ってのは父親と似た人を好きになるらしいぞ。つまりお前は、俺のことが」

少女 「きもっ、ありえないし！ タオルとか絶対わかるし、お風呂のお湯も毎回抜くから！」

男 「よくある反抗期だな、女の子特有の」

少女 「なに達観してんのよ、きもいから！ 内側から鍵かけて家に入れないようにしてやるから！」

男 「酷：：もうちょっと優しくしてくれても、いいんだぞ？」

少女 「するわけないでしょ、クズだったのに」

男 「だった？ 過去形？」

少女 「あーもう、うるさいっ！それより早く
行きなさいよ、あんたがいるとお母さん、
ここに來れないんだから」

男 「そうだな。じゃあ、また……あ、」

少女 「そういえば……」

男・少女 「名前……」

間。

男 「じゃあ、またな」

少女 「うん、またね、お父さん」

男 「……え？」

少女 「なによ？」

男 「いま、お父さんって」

少女 「ち、ちがう違うから！ さっさいき
なさいよ！」

男 「いってくる……いってきます！」

少女 「はいはい、いってらっしゃい！」

男、満足そうな顔をして去る。

少女 「いって、らっしゃい……行くからね、ちゃんと、会いに行くから」

少女、はっとして男が去っていったのと反対の方向へ体を向ける。

少女 「あ、えっと、はじめまして？ かな……
うん、お母さんの子供なの、あの時の……
： そうだね、あの人だよ、あの人が私の、
お父さんなの……私のことはいいの。それより、聞いて欲しい話があるの。もし、生まれ変わったら今度は……」

— 終 —